

作庭実習「森をつくる」13

環境共生園 2012

岩村 伸一¹⁾・金原 理恵¹⁾

Seminar in Garden Design “Creating a Forest13,” Kyosei-en 2012

Shinichi IWAMURA and Rie KINBARA

抄 録：京都教育大学の美術科で開講されている『作庭実習』は、作庭を通して森をつくるということをテーマにしています。参加者は、体を使って空間を変えることに取り組みます。ここでは、環境教育実践センター環境共生園を遊び場とする子どもたちの遊びを記録し報告します。また、2012年度作庭実習での取り組み内容も報告しています。

キーワード：庭，森，環境共生園，あそび，手入れ

「趣味のゴミ拾い」。こんな言葉の使い方があるのでしょうか。今のわたしはそんな感じです。趣味というのは、なかなか難しい言葉だと思っています。昔、まだ大学を出たばかりの若かった頃、駆け出しの仲間数人で使っていたアトリエに、ひとりの中国からの画学生が訪ねてきました。土産の茶をいれて、それぞれの作品について意見を述べあうなど、かなり意気投合し、少なからず盛り上がったのですが、将来にわたって絵を追求しようという段になって、意見が食い違ったようでした。彼は「絵を趣味として描いていく。」と述べ、わたしは「できたら仕事として続けたい。」と言ったのです。お互いが否定されたと感じたのでしょう、それぞれが相手を、なぜそんなことを言うのだという不思議そうな眼で見合うことになりました。わたしの方は、こんなに熱心な思いを持った絵描きが、趣味で絵を描く日曜画家のようなことで我慢しようとしていることに、ちょっとがっかりしたのです。が、彼は予想外の剣幕で、なんということだと蔑むような眼でわたしを見ているのです。気まずい空気。しばらく言葉を交わして、やっと合点が行きました。趣味という言葉のとらえ方が違っていたのです。わたしからすれば、趣味で絵を描くということは余暇の楽しみとして絵に向かうことを指していますが、彼にとっては、生涯をかけて真剣に絵に取り組むことを意味していたのです。そして当時の中国では、仕事というのは政府から与えられるもので自由に選択できるものではない、そんなものに一生は懸けられないということです。社会制度の違いがひとつの言葉の裏に貼りついているように感

1) 京都教育大学

じ、しみじみとした思いで茶碗に手を伸ばすしかなかったのです。だからあまり趣味という言葉は使わないようにしているのです。特にこの場合、中国での意味で使うと大袈裟な印象になってしまうのですが、わたしの状況を述べるにはこんな言い方しか思いつかないのです。

かつて庭作りに従事していたことを踏まえて、10 数年前に、大学の各所に生える木々をひとつの森としてまとめようと思い立ちました。それ以来、プロジェクト「作庭研究」として教育研究改革・改善プロジェクト経費による補助を受けながら、賛同する学生たちと共に、少しずつ手を加えてきました。ここにきてやっとまとまりを見せつつあると思えるようになっていきます。大学構内は地域に開放され、多くの人が訪れています。どうですかと声をかけてみたくもなります。ところがここに来て、思わぬものに眼がとまるようになりました。散乱するゴミでした。

いったん道の上に点在する異物に眼がとまると、その上に展開する豊かな緑の景観も、意識に残らないもののようです。とても残念に思えました。これは倫理観の問題であり、大学構成員のモラルの低下が原因なのだと考えてみても、なんだかむなし。教員養成大学であるのですから、指導しなくてはならんというのはもっともなのですが、要は、捨てる人の問題であり、不要物を身の回りにむやみに放置できる感覚に問題があるのです。先日、構内を通り抜けていく小学生が、チューインガムの包み紙を投げ捨てるのを目撃し、呼び止めて、ゴミを拾って帰るよう注意したのですが、その後なんだか自分の内側が気持ち悪いのです。こんないい加減で気の弱いわたしですので、ゴミ拾いキャンペーンを立ち上げるというのも、重い…。このまま嘆いていても少しも改善にはつながらない…。ということで、自分で拾うということにしたのです。

前期木曜の午後 3・4 限目に、主に 1 回生を対象とする『素描』という授業を担当しています。その前半の課題として「大きな絵」と称し、3×6 判のベニヤ板にトリノコ紙を張り、その画面(182×91 cm) いっぱいにデッサンするという内容を取り上げています。学生は構内にある好きな木の下に行き、対象に向かい体全体を使って描写に取り組むというものです。この時間がいいきっかけになりました。はじめは、ほんの思いつきでポリエチレンの小さな袋を手に学生が制作している現場に行き、ひとりひとり指導しながら周囲のゴミを拾っていたのですが、その袋ですぐにいっぱいになってしまいます。その都度ゴミ箱まで捨てに帰るのは面倒なので、大きなビニール袋を持ち出しました。

学生は構内全域に散らばっているので、ちょうどいいと思ってはじめてのですが、ゴミはそれ以上の密度で散乱していたのです。次の学生はすぐそこに見えているのに、そこに行き着くためには、幾多のゴミをこの袋に回収しなくてはなりません。春の終わりの陽射しの中で、何度屈伸運動を繰り返したかわかりません。受講生からは「何してるん？」と言う質問。わたしは「ゴミも拾っているのだよ。」と返事。いつの間にか、腰に下げていたタオルで汗を拭きつつの、かなりの労働になっています。結果、大きなビニールのゴミ袋 2 つを満杯にして、ゴミ箱までたどり着きました。変なことになったなと思いながらその袋をゴミ箱に収めた途端、妙にうれしい気持ちになっています。成り行きではじめてようなこともあり、予想もしなかったことなので、何だかわからんのですが、何か得をしたような感じ。良く飲み込めないままに、次週も続けようと決めていました。今でこそ大袋 2 杯というようなことはないのですが、趣味の

ゴミ拾いは続いています。こんなささやかなことではありますが、森の見え方は変わるように思えるのです。

さて、環境共生園です。やはり、ゴミの話からはじめてしまいます。ここで作庭実習を行っているとき、10月の後半から1月の終わりまででしょうか、作業中に見つけたゴミは、その場所を憶えておき、授業を終えて参加者が使用した道具類を片付けている間に、自分はそれらを集めて回ります。が、共生園から離れているときも、2週間に1回くらいのペースで、ここに来て、ゴミを拾います。この場所が草に覆われているときは、附属高校への道路の両脇を重点的に拾って歩きますが、草が刈られ、人が入るようになると、敷地全体をうつむいて歩き回るあやしいおじさんになる訳です。小さいポリエチレンの袋を下げて、それに落ちているゴミを回収するだけのことですが、これがなかなかおもしろい。前方左右交互に目をやりながら、一步一步ゆっくりと足を進めます。ゴミを探しているのですが、この探すというのが、わたしに興味と呼んで気に入っている理由なのかも知れません。小さい頃から林や草むらで食べ物を採取するのは大好きで、得意でもありました。森に入ってシイの実を飽きず何時までも拾っていたのです。これは今でも変わらず、春先のフキノトウやヤマウド、連休の頃のワラビ、変わったところではコシアブラ、きのこでは冬場のエノキタケや春盛りのアミガサタケ、梅雨時のキシガサタケなど、その時期にはワクワクしますし、行けば熱中してしまいます。探しながら前方にぼんやりと視線を送っているのですが、対象物が視界に入るとすぐにピントが合う。我ながら便利な目だなと思います。センサー装備の採集眼。おそらく縄文の採集民が祖先なのでしょう。が、ここで述べていたのはゴミ拾いの話なのですけどね…。

今回の報告の書き出しからここまで、やたらと「ゴミ」という字を書いているようです。わたしはいったい何をゴミと呼んで目標にし、集めているのでしょうか。不要になり廃棄されてある物、ということは当然であるとして…。まず思い浮かべたのは「人工物」という答えです。わたし自身は地面に落ちている人工物を拾い集めているつもりでいたのですが、庭そのものも人工物であることに思い至ると、どうやらこれでは正確でないようです。「工業製品」という言葉に換えるとほとんど網羅しているのかな…。

近頃、よく拾う物を思い出してみると、コンビニで買い物をした商品を入れてもらうポリエチレン袋、飴玉や菓子のパッケージ、紙やプラスチック製など様々です。それにおにぎりの包装。コーヒーやジュースの空き缶、ときにはお酒の紙パック。特に多いのが、たばこの吸い殻です。ほとんどのものは足で踏みつぶされて火は消されているようですが、道沿いの排水口に消されずに投げ込まれているものは、少々心配です。その中にたまっている乾いた枯れ葉に燃え移って、葉の一部が炭になっているのを、先日見つけました。何らかの対策が必要であるのかも知れません。それにゴミを持ち込むのは人間だけではないようで、森の奥の方ではカラスやネコがどこからか引っ張ってきたと思われるものも多く見られます。ずたずたと引き裂かれて中身が空になったマヨネーズのチューブは定番です。

こんな物から、ここで遊ぶ子どもたちは勿論、くつろぐためにこの場所を訪れる人や動物が想像できます。校門から出て少し気が緩んで菓子を口に運ぶ高校生…というのはあるでしょう。仲間を出し抜いて安心できる枝の上でゆっくりと食事にありつくカラス…。それに、どうせ一

服するのならましな景色を眺めながら…というのも領けなくはありません。環境共生園が、そんなくつろぎの場になっているというのは、少なからずいい感じです。その場合、出てくるゴミをちゃんと自分で処分してくれたらもっといいのですけれど。

あ、工業製品でないものも拾っていました。定植した苗木に施した支柱の青竹やシュロ縄の余分な切れ端などは真っ先に回収しています…。ちょっと違う方向から考えます。わたしがここでゴミとして拾わないものに焦点を当てると、落ち葉や枯れ枝、落下した木の実などです。一度もゴミだと思ったことはありません。それらは、このままこの場所の土に還るものです。ところが、仮にここが街中の住宅地の道路上であったとすると、それらも躊躇なく、その場にそぐわない物として処分されるはずです。どうやらゴミというのは、場にとっての異物であり、この場所をどう認識しているかによってその内容が変わっている。わたしはここを森であると考え、本来森に属さないものを取り除こうとしている。森に属するか属さないかを境界にして線を引いているようです。この環境共生園をささやかながらも森として認め、その価値観に添って、森としての精度を上げようとしています。この森のメンテナンスの一環としての異物の取り除きでありました。

実は、環境共生園に来るときはいつも、ゴミ拾い用の袋とともに、剪定用のハサミとノコギリをポケットに入れています。何らかの理由で折られた枝先を切りなおしたり、無理にちぎられささくれ立った傷痕を、丁寧に切り落としていたりしているのです。こんなちょっとした手当でも木々はまた再生し、森の印象はすさんだものから柔らかいまとまったものになるのです。これが、日ごろの手入れ—メンテナンスの重要な部分だと考えています。

2012 年の初め、いつもの手入れにこの森に来てその手が止まってしまいました。あたりがひどく荒らされています。修復できると想定している程度を超えた有様を前にしたのです。いくつかの木は枝を何か所もむしり取られ、樹形が変わっています。特に被害がひどかったのは、道に近い 2 本で、それぞれこれからの成長を注目していた木でした。ひとつはコブシの木です。コブシは造園で苗木を植える際、水の加減が難しい樹木のひとつです。この木は、何年か前に共生園の北のほうに定植されたのですが、都合でこの南側に移されたものです。ここに導入した数本のコブシのうちの生き残った 1 本で、しかも前年の夏に枯れかけたのを、幹の上半分を切り取るという荒療治で再生させたばかりでした。今後頼りにしようと思っていた枝を、幹の皮ごととはぎ取られていました。もうひとつは前年に植えたネムです。作庭参加者が自宅から持ってきた苗で、長らく室内での鉢植えで育ち、固まったようになっていたというものです。ここで鉢から移されて土が合ったようで、2 本の枝を大きく伸ばしはじめたところでした。その枝を左右から思い切り引っ張ったのでしょうか。幹が中心で大きく裂けてしかもねじれています。コブシは枝を丁寧に切り直し、はがれた皮の部分には傷の癒合と蒸散防止をかねて薬剤をたっぷり塗りました。ネムは幹の裂かれた部分を切り落とし同様に薬を塗っています。

唐突ですが、ここからは大学院美術教育専修所属の金原理恵さんの報告にバトンタッチします。彼女は、現在、修士論文完成を目前にしてウンウンと唸っている最中だと思われます。その論文の材料として書き溜めたメモの中から、貴重な時間を使って報告してくれました。

私は、大学院で「あそび と つくる」をテーマに設定し研究をしている。2011 年度の後期授業『作庭実習』に参加した。町の中のこの少し不思議な空間—環境共生園は、様々な方向から人々が関わり存在している。

以下、この報告文では、作庭の作業経過ではなく、子どもの遊びを中心に、そこで遊んでいた子どもたちとのやり取りや様子を観察し、時系列で記述する。



石据えに使った三叉の窪んだ跡に



石の上に

2012 年 1 月 11 日撮影 岩村

● 2012 年 1 月 12 日（木）

この日、共生園に着くと、一見のどかな里山の田園風景から荒れ果て寂れたような印象を受けた。せっかく据えた石は掘り返され、どこから引っ張り出したのか木の棒も散乱している。そして裂くように折られている木が何カ所も見つかる。その中でも、植えられて間もない小さなネムの木とコブシの木の 2 本は、ほぼ修復不可能に近い。先生や受講生達は、折れた木の切り口を整え、折った所から水分が蒸発しないように酢酸ビニール系のオレンジ色をしたボンドのような薬をたっぷりと塗った。酷い折れ方をしていた木は裂かれたすぐ下で枝を切り落し整えられた。二本とも地面から棒がニョキッと生えたような何とも哀れな姿になってしまった。犯人は誰だろう。不審な大人がここでボキボキ折っていくのか、あるいは遊びの限度を知らないストレスを溜めた子どもか等の話し合いがあった。私は、まず焦点を絞った。相手はおそらく、木の折られている位置が共通して低いことから小学生だろう。また、「この環境共生園は、常に開かれた、すべてに通じる道を持つ、人々の往き来する場でなければなりません。」¹⁾と掲げられたこの思いから、いろいろな人がこの場を行き交い、そしてもし子どもたちなら、いつも吹いている心地よいこの風の中で、悪戯を除いた遊びを展開して欲しいと思った。

私は、小さくて、心に残るもので、ばかばかしいもの「お手紙」を書こうと思った。

この手紙は、誰宛に届くか分からない。私は手紙の送り主を、空想して頭の中で広げていてほしいと思ったため、大学名、所有者、出所等は、ばかそうと考えた。そこで送り主は森の妖精「チャコ」君（6 歳）とその母親という設定にした。手紙には「木を折り裂く、据えた石を動かす」この 2 つの遊びをやめるよう書いてもらうことにした。手紙の紙は私の普段の制作時の余りとして出てくる和紙を使用した。これは和紙に色を重ね何回も揉んで下の層を出していく「揉み紙」という技法を施した少し厚手の和紙で、さわり心地や色合いから、妖精の不思議感が出ると思った。ここで岩村先生から「プンブン怒っている感じを出しといてくれ」とい

う注文があり、森の妖精チャコくんには「プンプン」君（6 歳）という名前に変更してもらった。プンプン君には漢字、かな、カタカナの使い分けがまだ分からない、下手くそな字だが、丁寧に読みやすい手紙を書いてもらった。

ココデあそぶひとへ

コンニチハ、ボクハ ココの森ヲ作ッテイルようせいデス。

イツモ、ミンナのあそびヲ トオクカラながメテイマス。

ナガメテイルダケデトテモ、トテモ、ボクハ幸セデス。

デスガ ボクガタイセツニ

ソダテテイル木ヲいじめたり、セツカク気ニイッテオイタ

石ヲウゴカシタリシナイデクダさい。

ミンナハ、トテモイイコナノニおられた木ヤ ウゴカサレタ石ヲミルト

ボクハ、ナンダカ トテモカナシイのです。

大切ニあそんでクダサイ。ちなみにコレハ、ボクのともだちカラスの

チャッピーからもらったボクの宝ものデス。

ボクはヨウセイでみえないので

みんなといっしょには あそべナイケレド、

ボクはみんなのコトはだいすきデス。

森ツクリのヨウセイ プンプン より

そしてプンプン君は念を込め手紙をこすって風合いを出し、くるくると丸めて手の平大の小さい牛乳瓶につめ、彼の宝物のキラキラ光るプラスチックの水色の宝石、ビーズ、銀杏を入れた。次にプンプン君の母親にも手紙を書いてもらった。いつものように手慣れた文字で、しかも気を効かしてふりがな付きで書いてくれた。

この^{もり}森で^{あそ}遊ぶこどもたちへ

^{わたし}私はこの^{もり}森を^{つく}作っているものです。

どうか^よ良い^こ子^みのみなさん。

^き木^おを^さ折り^さ裂いたり

^{なら}並べている^{いし}石^{いどう}を移動させないでください

ここにあるもの^{すべ}の^{ひと}全て一つひとつ^{ていねい}丁寧に^う植^{そだ}え育て

^{つく}作っているものばかりです。

^{たいせつ}大切に^{あそ}遊んでください。

^{もり}森ツクリの^{ようせい}妖精プンプンの母より

ブンブン君の母も念を込め手紙をこすって風合いを出し、手紙を丸め少しブンブンよりも縦長の細い瓶に入れた。また、木に掛ける掛け札を3つこしらえてもらった。

「折られたこの『ねむの木』がいたいと泣いていたので薬をつけました。

もうこのねむの木はダメかもしれません。大切に遊んでください。」 ← 1つ

「よい子のみなさん木を折らないように」 ← 2つ

● 2012年1月13日（金）昼



共生園で、大きな岩の上に目立つよう1個と、以前、岩村先生の作られた看板に麻紐をかけて2個目の瓶をぶら下げた。それから掛け札を、折られたネムの木と折られ方がまだましな少し離れた箇所の木に一つ、森の奥の方の折られた木にも一つ掛けた。一番折られ方が酷かったコブシの木はあえて外し全体的に森を覆う感じになるよう偏りなく掛けた。風が3つの掛け札をまるで手を振っているかのように揺らした。

● 2012年1月16日（月）

瓶が消えていた。少しの風では取れないよう少しきつく紐で縛っていた掛け札の紐は全てゆるめられ、またわざと掛けなかった一番酷くやられているコブシの木の下にそっと置かれる様にして掛け直されていた。18日（水）に岩村先生に現状を報告する。

● 2012年1月19日（木）

小雨の降る中、看板の下に手紙入りの瓶を一個発見する。瓶の蓋を開けた瞬間、蓋にからみ付いた砂のジャリジャリという音がした。瓶の蓋の縁が砂だらけだった。おそらく子どもが砂で遊び回りその手で蓋を無理矢理、開け閉めしたようだ。蓋についた黄土色の砂が、はらはらと私の青色のつなぎのズボンの上にこぼれ落ちた。淡い空色の便箋に、幼い子どもの文字で

ようせいさんへ

ごめんなさい

これからは、木をおらないし、石もうごかしません

これからもあそばしてください。

という文の手紙が入っていた。私は掛け札も全て回収した。

私は、共生園でガサゴソと落ち葉を蹴ったり踏みしめたりしながら、できればこの子どもたちと一緒に駆け巡って遊びたい。しかし、この子どもたちに近づけない距離が気に入っている私もある。今回、手紙の入った瓶が偶然にも子どもたちの世界と私の世界、その二つの世界を往き来した。この瓶が往き来したことは、その場に子どもがいて遊びが展開された小さな証かもしれない。子どもたちは共生園にある様々なモノの持つ意味を変え、ある設定やお話にして遊びを展開しているのだろう。後日、この荒らす行為は、一応収まった。しかし、それは、一時のことで、また荒らされることとなり、この「お手紙作戦」は今ひとつだったようだ。岩村先生はまたブンブンされていたが、その3ヶ月後、私は偶然にもその子どもたちの遊びを観察することができた。

● 2012年4月7日（土） 風が冷たい晴れた日

13:00, 私は共生園で絵本制作のための資料集めとして、スケッチをする。

13:30, 子ども4人（小学校低学年程の男子2人、幼稚園児程の男女児各1人）が環境共生園に入ってくる。私は資料集めをしなければならないため、そのまま無視して森側（北側奥）にてスケッチをする。子ども4人は南側の里山あたりと、北側の森の部分を駆け回る。両手に枝を持って走る子、また少し長めの枝をもって石から石へピョンピョンと飛び乗っている子、皆、枝をとにかく手に携えて走っている。モミジバフウの実を片手でピョコピョコさせながら、やはりこの子どもも片手には枝を持っている。以下は、聞こえてくる子どもたちの会話をスケッチの絵の端にメモしたものである。私は資料集めのスケッチも忙しく、子どもたちとは距離的に離れた位置におり、聞き取れた言葉だけを拾っている。（会話のみで少々読み辛いが）

「武器を探しにいくわー」「隠すんやでー」「おにいちゃん」「りょうへいくん」「さきちゃん」「武器をさあーここに集めてさー」「ここにあった石」「この武器ここに置いて」「めっちゃいい武器」「ここにあった」こんこん（何かに叩きつけている）川の上流に位置する石の上にたくさんさんの枝を置いているようだ。



2012年4月7日撮影 金原

「おにいちゃん めっちゃすごいでー 水でてなー・・・めっちゃ・・・」（部分的に聞こえた言葉、水を出していたのかは不明）この後、子ども同士の会話が続き、子どもの活動場所が、北側の川の上流部分から南側の松林、里山近くに移動する。私は、しばらく北側におり、スケッチを区切りの良いところで切り上げ南側へと移動する。南側の里山の中の段々畑に腰をおろし、またスケッチのふりをしながら、子どもたちの会話を書き取ってみた。なお、あまり近づくと怪しまれるため、子どもたちの活動場所には背を向けず、視野90度あたりに入る感じで書き取った。以下、様子と会話をメモしたもの。——は書き取れなかった箇所、・・・は距離的に離れて聞き取れない部分とする。

園児程の男の子（以下、園児・男）が小枝を投げている。「れいくん、これ何かに似てる？（園児・男が別の少し大きい枝を拾って聞いている）」「今ここオークションな（大きな子守り石の上は枝だらけになっていた）」「今ここ準備中」「店売人は——」「りょうへいくんと一緒にいってはんねん」「魚釣りのやつ、これなあ、これなあ、真ん中。（園児・男は、枝をいっぱい並べたこの子守り石の上に釣り竿のような曲がった枝を置く）」「オークションでいい？」「あなああ、れいくん叩いていい？（園児・男が何か枝で叩こうとしている。おそらく木のように見える。書き取るのに夢中で様子を見逃す）」「みんな・・・」「やからな、途中でな」「だからな、今オークション言ってるやろ」「だからな、一緒にして」「こっちは武器集めだよ」「これをな、こうしてな、こうやってな、ポキ！（園児・男が枝をポキポキ折り、皮をむしっているように見える。私は落ちている枝だと思うが確認できず）」「だから、これひとつでガキーン、ガキンチョ」「これさあ、おんなじ長さ集めんねん」「だからさ、どんだけつくる気やねん」「いっ・・・」「これな——」「楽器がどんどん増えていく ドーン。楽器がどんどん増えていく ドーン。（園児・男が枝を持って言葉でリズム遊びをしている）」「この楽器のやり方知ってる？」園児・男が枝をポキポキ折っている。折る音で楽器として楽しんでいるようだ。落ちている枝で遊んでいることを祈る。「楽器遊びしてんのん？」「これなあ、もっとつくって 武器つくって」「もう！」「こんなん見つけた」「うわ、こうやったら木が揺れる」園児・男が拾った枝のようなものを両手で持って細い木になすり付けてこすっている。私は木が折れないように祈るばかり。「こうやったら折れていく ポキ！」園児・男が枝をポキポキ折っている。「こうやったら最強やで」

森の奥から小学校低学年程の男子一人が大量の枝を抱えてこちら（南側）に向かってくる。「こうたの武器は最強なのだ」「子ども用の釣り竿 釣り竿」また子守り石の上に枝を並べる。「いいやん」「ふふふ」「よっしゃ、とれたあ、さっきのやつ貸してえ」

園児・男が細い木の幹を片手に握りながらその周りをグルグルと旋回している。木はしなっ

て今にも折れそうである。

私は、なんとか枝がたくさんあった子守り石の写真を撮りたく、子どもたちに近寄った。風景を携帯のカメラで撮るフリをし、うつむいた瞬間に子守り石を撮影する。



2012 年 4 月 7 日撮影 金原

しばらくして子どもの活動場所が北の森側に移動していく。この地点で 14:00 頃。私は、寒さで限界を感じたため、共生園を離れる。

今回、子どもの様子を傍で観察していると、子どもたち個々の活動の方向性は一致していないところもある。しかし、個々の遊びが上手く関わり合いながら、まるで玉突きの玉が互いにぶつかるように、遊び同士が影響し合っていた。2 人の男子は枝というモノが武器探し→武器隠し→武器集め→オークション→店準備と、ある一貫した展開を見せる。一方、園児・男もその遊びに参加しようとしているのか、同じように枝を集める→魚釣りの竿を見つける→楽器とする→再度湾曲した枝を見て釣竿とする（一緒に売ってほしいつもりだろうか？）→木の周りを巡回する。その子の目の前で繰り返されている武器を売るという一貫した遊びのルールからは少々ズレているが次々に周りのモノから影響を受け、その子なりにルールが変化している。

私はそんな子どもたちの遊びに影響が出ないように途中からスケッチをする人を演じ、子どもの遊びの一風景として身を置いた。遊びに参加はしていないが、もしかすると私の存在も子どもたちの遊びの一部としてあったかもしれない。怪しまれないように、子どもたちの遊び場所が移動する度に距離をとって追いかけたが、観察者としての私が移動する度に子どもたちは反対の方向へ離れていくことを微かに感じた。

遊びは、個々に遊びのルールや方向性を持ち、それぞれが持つ世界が互いに関わり合いながら動いていく。途中、誰かの影響でその連続する流れは捻れても、その連続する行為をやめない限りまた遊びは発展していく。遊びはそれぞれの視点でその場に関わり、周辺の意味を自由自在に変えながら進む。その後にはいろいろな遊びの形跡が現れてくるのだろう。



枝の塊ではなく箒のような？



2012 年 4 月 10 日撮影 岩村

わたしは、そんなにプンプンしている訳ではないですよ。再生が危ぶまれた2本の木は手当が早くて良かったのでしょう。コブシはまた新芽を出し、将来を託せそうな枝を勢いよく伸ばしています。ネムにいたっては何事もなかったかのように、憎たらしいくらいに枝を広げました。

この森が「なるようになってきた」と感じ、「みること」を森をつくる方法にしようと決めたのは、2008年のことです。「抜かれたら植え戻す、折られたら切り直す。」とその年の作庭実習報告²⁾に述べました。そのことは今も変わりません。実は、その報告で取り上げた、段々畑上段に設置した立札『ココデ遊ブヒトへ』³⁾が、この春の風の強い日に倒れました。それを片付けながら、恥ずかしいものがなくなって胸を撫で下ろし、安心するような気持ちになりました。少しずつわたしがこの場にとっては見えない人になっていけるように思ったのです。

その当時、この共生園の起伏の上を自転車得意気に走り回っていた子どもたちと、今回、ワクワクするような出来事として金原さんに報告された子どもたちは、当然、別の子ともたちだと思われるのですが、この空き地が、子どもたちの眼差しによって、遊びを作り出し更新していく場として、しっかりと認められ引き継がれているということを、うれしく思っているのです。

今年（2012年）度作庭実習の環境共生園での作業について述べなければなりません。崩された畦道の石垣補修や、赤松が成長したことで林に取り込まれてしまったサクラの植え替えなど、細かいこともいくつかやったのですが、ここでは2点を記しておこうと思います。野筋の改良と石仕事です。

前年度に、南側一帯に土を加え地面を高くするという、野筋の改良をしました⁴⁾。これは、棚田の方向へ水が流れるための工夫であったのですが、その結果今度は、段々畑後方の起伏がせせこましく窮屈な感じになり、不自然に思えてきました。そこで、その急な曲線2段になった稜線の低くなっている辺りに土を加えて、柔らかいひとつの傾斜にすることにしました。真砂土8リ्यूベを一輪車で根気良く運び入れ、レーキで表面を整えます。今年はOBの飛び入り参加もあって、予想を上回るスピードで土の運搬は進みます。が、ここの野筋は、池の西側の山と南の赤松の林をつなぐ視覚的に重要なところにあたり、難しいところです。なかなか地形が決まりません。少しずつ土を加えては踏み固めて均し、東側の道の上に戻っては眺めるという繰り返し。何度も微調整を行いました。これにしよう一応の決定をみたのは、年の暮れの授業後でした。それでもなんとか落ち着いた印象を与えることができたのではないかと思います。

もうひとつは、石の仕事です。古川三盛氏の作庭現場のひとつである今西家書院⁵⁾の庭改修等で不要となった庭石を譲り受けました。環境共生園の敷地のどこか目立たないところに積み上げておいて、必要に応じて使っていこうと考えていたのです。実際にトラックに積んでここへ持ってきて転がしてみると、おもしろい石が多く、片付けるよりも使おうじゃないかということになりました。今回来た石の山には、平らな面を持つように加工された切石の味わい深い表情のものがいくつか含まれています。これらを活かして「延べ段」を造ることにしました。これは、石の平らな面を組み合わせで大きなひとつの面とし、その上を人が歩けるようにした

石畳のようなもののことです。お茶の庭の作庭において、その主要な要素である路地を飛び石などと組み合わせて構成するのに使われる技法です。環境共生園は、もともと里山の景観を模して造られてきたので、延べ段を施すのに適した場所は本来無いのですが、2010 年度に設置した「門」⁶⁾の周辺であれば違和感無く据えられ、また役に立つのではないかと考えました。

古川さん、山内君の指導の下に、この石据えは始まったところです。当然のことではあります。作庭実習受講者の実力では専門家の現場のようにはいきません。スコップやツルハシの使い方から、石の動かし方、据え方まで、初めてのことばかりです。ひとつずつ確認しながら、それでもゆっくりと進んでいます。が、そのことが大切なことだと思っています。工期が限られているということは無いのですから、いつ仕上げるのか、今は考えないことにしています。この延べ段の完成はおそらく次年度以降になりますが、どんなものがあらわれて来るのでしょうか。無心で取り組まれるものからは、予想を超えた作品が生まれ、意外な良さが感じられるものです。本当に楽しみです。



2012 年秋、いつもの手入れにこの森に来て、その手が止まってしまいました。また、あたりが荒らされています。被害を受けたのは、前年度末に定植したヤブニッケイの苗木でした。支柱をしてあったところで幹が折れ曲がり垂れ下がっています。ペンチのようなもので切ろうとしたのでしょうか、強い圧力がかかったところで幹は潰れています。わたしは即座にその潰されたすぐ下で丁寧に切り直し、回復を願って薬剤を塗りました。



整えられた野筋に石が据えられた

註

- 1) 岩村伸一（2007）『作庭実習「森をつくる」6 環境共生園について（1）』京都教育大学環境教育研究年報第15号 p.97
- 2) 岩村伸一（2009）『作庭実習「森をつくる」9 環境共生園について（3）』京都教育大学環境教育研究年報第17号 p.129, p.130
- 3) 同 p.125 参照
- 4) 岩村伸一（2012）『作庭実習「森をつくる」12 環境共生園について（5）』京都教育大学環境教育研究年報第20号 p.98 参照
- 5) 今西家書院（奈良市福智院町）。室町時代の書院造りの特色をあらわす建物は重要文化財の指定を受けている。その書院の周囲に展開する庭園の作庭には古川三盛氏があたっている。わたし（岩村）にとっても、作庭をはじめた頃この庭で多くのことを学んだ、思いのある庭のひとつである。
- 6) 元陸軍第十六師団輜重部隊遺跡のこと。橋本侑佳・岩村伸一（2011）『作庭実習「森をつくる」11 環境共生園2010』京都教育大学環境教育研究年報第19号 pp.54-56 参照